

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第七回

10章 大坂除痘館

嘉永二年（一八四九）

嘉永二年（一八四九）の如月、緒方家は深い悲しみに包まれた。

長女の多賀が風邪をこじらせ、あっけなく亡くなったのだ。

乳児の頃に長男を亡くしていたが、七歳の娘の死はそれとまった

く別のものに感じられた。八重は多賀の着物を抱いて、涙にくれた。

医家でありながら娘の死を防げなかったことは、なんと情けなく、

無念であることか。洪庵の胸には、虚無感が去来した。

だがその直後に、江戸から吉報が届いた。長らく待たされていた

洪庵の代表著作のひとつとなる「病学通論」が完成し、三百五十部
刷られ、百五十部が洪庵の手元に届けられたのだ。

このように、悲喜こもごもの報せが綾を成すように洪庵の許に届
き、心は千々に乱れた。

けれども天は洪庵に、そんな感傷に浸っている時間を与えてはく

れなかったのである。

嘉永二年八月下旬、過書町の適塾に、京の小石元瑞の塾「究理堂」に移籍していた元塾生が駆け込んできた。

「洪庵先生、朗報です。六月に長崎に入港した船が牛痘の瘡蓋を運んできて、オランダ商館医モーニケ殿が檜林宗建先生のご子息に接種したところ、七月に生着したとの一報が日野鼎哉先生のところに入りました。一刻も早く、先生のお耳に入れようと、参上した次第です」

「なんと素晴らしい。宗建先生がついに我等の宿願を成し遂げられたか。待ちかねていた朗報を、ありがとうございます」

洪庵はそう言って立ち上がると、読みさしの蘭書を床に落とした。本をなによりも大切に扱う洪庵には、滅多にないことだった。

日野鼎哉はシーボルト門下生の蘭方医で、天保四年（一八三三）、三七歳の時に京の権威・小石元瑞の紹介で医業を開いた。今や京の名医、新宮涼庭と名声を競っている。

気が逸る洪庵は、直ちに大坂の蘭学結社である橋本宗吉門下の者たちに招集を掛けた。

料理を出す宿屋「花外楼」に、橋本宗吉を統領とする浪速一派が顔を揃えた。

洪庵が吉報を伝えると、橋本宗吉は「でかした。よくぞ……」と声を詰まらせた。

するとその場にいたひとりの医師が怪訝けげんそうな声を出す。

「はて、オランダからの牛痘株かぶとはまた面妖めんようなことですか。兄はここ数年来、牛痘株の輸入しゅうしんに執心しつしんし、弟子の笠原良策殿かさばりようさくと謀はかつておりました。越前藩えちぜんの笠原殿は重臣なかねせつこうの中根雪江殿の協力で、牛痘輸入願ろうじゅういを提出し昨年、松平春嶽侯は幕府に『痘苗諸願とうびょう』を届け出て、老中・阿部正弘殿が長崎奉行に痘苗入手推進を下命あべまさひろしました。でもそれは唐通事とうを介した清国しんからだったはず。それに、もしそれが本当なら、兄はなぜ私に報せてくれなかったのか……」

そう言うとき日野葛民かつみんは、面を伏ふせた。

彼は、実兄の秘密主義的な行動に少し傷ついたようだった。

葛民は鼎哉の実弟で、兄と共に日田ひたの広瀬淡窓ひろせたんそうの「咸宜園かんぎえん」に入門なるたまじゆくせいし、その後シーボルトの鳴滝塾生なるたきじゆくせいになった。

そして天保十一年（一八四〇）、広瀬旭莊きんくそうの世話で大坂道修町どしやうまちに蘭医院を開業した。

開業祝いの宴席えんせきには洪庵の他、漢方医の親玉・原老柳はらろうりゅうや広瀬旭莊、岡部元民など文化人も多数集まる、派手はでな船出となった。

「確かにその話はおぬしから聞いておった。だが長崎なら、どんなことが起きても不思議はなからう」と橋本宗吉が慰なぐさめるように言

う。

すると、洪庵が興奮を隠しきれない声で言う。

「細かい事情はいずれはつきりするでしょうが、長崎で痘苗が生着したのであれば、大坂でも受け入れる支度したくをしておくべきかと存じます。準備を整えて京に伺いうかが、分苗ぶんびょうをお願いしようと思います。浪速しゆじゆの種痘事業は日野葛民先生に頭領とうりやうをお願いし、僭越せんえつながらこの私も先頭に立ち、やらせていただこうと思います」

「よろしい、やるべし」と重鎮じゆうちんの橋本宗吉がうなづく。すると日野葛民が言う。

「もちろん私もやらせていただきますし、兄も、私が頼めば嫌とは言いますまい。しかしながら浪速の頭領は、洪庵殿にお願いしたい。この問題はいずれ奉行所なども巻き込み、広げていく必要があります。ならば新参者しんさんものの私よりも、『病学通論』という画期的な著作じやうを上梓ししたばかりで、盛名せいめいが更に広がっておられる洪庵殿の方が適任かと存じます」

「異議なし」との声が飛び交った。

「わかりました。不肖ふしやう洪庵、粉骨碎身ふんこつさいしん、この重責じゆうせきを務めさせていただきます」

洪庵はためらわず、きっぱり決意を告げる。

なにごとにつけても控えめな洪庵が、前のめりで自分が先頭に立

つ決意を表明するとは、大変珍しいことだった。

橋本宗吉が「皆、前祝いぢや」と言い、祝膳しゅくせんを用意させた。

乾杯かんぱい、と唱和しょうわする声が、花外楼の大広間に響いた。

*

その当時、痘瘡とうそうは、最悪の疫病えきびょうだった。

日本に入ってきたのは奈良時代と言われているが、当初は七十年周期の流行だった。しかし次第に流行間隔かんかくが短くなって、七年になり、この頃には毎年のように小流行していた。

潜伏期せんぷくは十日。頭痛と高熱を発症し、三日後に全身に赤い発疹はっしんが現れる。いったん小康状態しょうこうじょうたいになるが次の三日で発疹は丘疹きゅうしんになり顔や手足に密集する。その頃になると全身が猛烈もうれつな痒みかゆに襲おそわれ、患者は気が狂いそうになる。

やがて丘疹は透明な水泡すいほうになり、二、三日後に膿疱のうほうになる。

この時点までに脳炎のうえんで狂乱状態きやうらんとなった患者の三割が死亡し、角膜炎かくまへんを併発へいはつし、失明しつめいすることもある。

順調に回復すれば膿疱は乾いて瘡蓋さいがいとなり、二週間で快癒かいゆするが、剥げ落ちた跡あとは荒肌あばたとなり一生残る。当時の日本人の四割が感染していたとも言われる。

これを俗に「ホトボリ三日、デソロイ三日、水膿三日、山アゲ三日、カセ三日」と言う。

予後は痘の形状をみて占なつた。瘡蓋が疎はよく密は悪い。桃色は吉、紫や藍は凶、腰痛や吐き気、口臭の強い者は全て凶で、膿化は早い方が吉とされた。

民草は神仏に頼り、まじないや迷信が横行した。

痘瘡神が崇められ、痘瘡は赤い色を嫌うという俗説から、赤い鍾馗像の錦絵が流布した。

痘瘡の瘡蓋がとれた頃、酒を加えた米のとぎ汁で洗う、大酒湯という風習も盛んに行なわれた。それは猛烈な痒みを抑える民間療法だった。

「道修町の神農さん」の愛称で呼ばれる、菓や酒の神・少彦名命を祀った神社が信仰を集めたのも、この頃のことである。

だが中にはそうした流れに抗って、医術で痘瘡に対抗しようという動きもあつた。

文化七年（二八一〇）、長崎の吉雄耕牛と志筑忠雄の門下生だった甲斐の橋本伯寿は、その著作「断毒論」で、痘瘡、麻疹、梅毒、癩病は外国渡来の有形毒が原因の「有形伝染」であり、鼻や口から伝染する「一生一度の病」であると見抜いていた。

しかし、免疫の概念を包括したその先見の明は当時、受け入れら

れることはなかった。

痘瘡については、当時も様々な知見ちけんが積み上げられていた。

痘瘡は一度罹かかると二度は罹らないこと、また、重症化し致死率ちしりつが高い「大痘瘡」と、軽症で致死率も一パーセント以下の「小痘瘡」の二種類があることが知られていた。

なので「小痘瘡」を人工接種する「人痘種痘法じんとう」が試こころみられた。寛保二年（一七四二）刊の漢方の聖典「医宗金鑑いそうきんかん」には、人痘の接種手技や瘡蓋の保存法についての記述が見える。

日本では延享二年（一七四五）、長崎に来航した清国の医師・李り仁山じんせんが伝えたのが最初である。

また、江戸中期には、痘瘡の治療や種痘を専門とする「痘科とうか」も成立していた。

名医として知られた久留米藩くるめはんの緒方春朔しゆんさく（惟章これあき）は、三千人に種痘しひとりの死者もない、と著書に書き残している。だが実際は痘瘡を発症してしまい、死に至る事案も少なくなかったようだ。

このように人痘種痘術は、江戸後期の化政時代かせいには医術として成立していた。

洪庵にとつて、種痘は因縁深い業病いんねんぶがだった。

長崎留学で「トルコ式」を学び、足守あしもりに帰郷した際には、長崎から持ち帰った瘡蓋を使い、兄の子の甥おいと姪めいに人痘種痘を実施してい

る。

この時、甥と姪は重症化せず、無事に善感ぜんかんしたものの、熱が高く危険を感じたため、当初予定していた地元の子どもへの接種は見送った。

適塾あてはらやが過書町に移った弘化二年（一八四五）、高麗橋こうらいばしの白粉商おしろいしやうの勘原屋で、子どもが立て続けに痘瘡で亡くなった。もともと持病で洪庵に掛かっていた祖母は、最後に残った二歳の孫だけはなんとかも救いたいと、名医の呼び声高い彼に、孫への種痘を願い出た。

この時は洪庵は、鼻吸引の「清国式」を試みている。足守でうまくいかなかった「トルコ式」を、変えてみようと思ったのだ。

だが残念ながら、この男児は痘瘡を発症して死んでしまった。けれども、種痘を依頼した祖母は、洪庵を責めなかった。

むしろこの失敗を糧かてに、他の子どもを助けてほしい、と懇願こんがんされた。

しかし、そんな風に理解してくれる者は少なかった。

後に洪庵は、「痘瘡に自然に罹って命を落とす者は天命だ、と誰も咎とがめない。だが種痘で命を落とせば、人は必ず種痘に罪を着せると嘆なげいている。

新しい適塾は「過書町適塾」と呼ばれ、希望者が陸続りくぞくと入塾してきたが、その華々しい船出の陰で洪庵は、人痘接種の失敗で幼児を

死なせるという、苦い経験をしていたのである。

その失敗を、洪庵は長い間、悔やみ続けた。

現代にも共通する、予防医学の最大の問題点に、洪庵は直面したのだ。

なるほど、種痘を行なえば、うまくいけば後に痘瘡に罹らずに済む。けれども種痘で命を落としてしまったのでは、本末転倒ではないか。

その問いを洪庵は終生持ち続けた。

それが医師としての、洪庵の誠意であり良心だった。

しかしながら、それは大変な、当時では解決不能の問いだった。

江戸時代よりはるかに医学が進歩している二十一世紀の現代でさえ、その問いに対する正解は出ていないのだから。

*

一方、世界を見渡すと、痘瘡治療に関する画期的なブレークスル―は英国で起こっていた。「牛痘種痘法」が発見されたのである。

一七九六年五月、村医エドワード・ジェンナーは天才の少年に、牛痘に罹った女性の水泡から取った痘漿（膿）を植えた。

すると痘瘡より軽症の牛痘に罹ったものの、以後痘瘡患者の膿を

植えても発症しなかった。

ジェンナーの発見は、学会ではなかなか承認されなかった。

だがそれでもジェンナーは粘り強い報告を何回も続け、それにより、次第に牛痘種痘法は世に広がっていった。

シーボルトは長崎赴任ふじんの際、バタビアから牛痘の痘漿を持参した。だが、海路は長旅の上、南洋は気温が高く、痘苗が劣化してしまい、日本に到着時には効力を失ってしまうのだった。

実は牛痘種痘法が最初に日本に持ち込まれたのは、ロシア経由だった。

シーボルトが牛痘輸入に失敗した翌年の文政七年（一八二四）、シベリアに抑留よくりゆうされた時に牛痘法を学んだ中川五郎治なかがわごろうじが帰国し、蝦夷えぞで種痘を始めた。五郎治は松前藩で閑職かんしやくの微禄びろくを得たことで満足し、秘伝としたため世に広がらなかった。

九州では大村藩の長与俊達ながよしゆんたつ（長与専齋せんさいの祖父）が、人痘を牝牛めうしや仔牛こうしに感染させ牛痘を作ろうと試みたが成功しなかった。牛痘は、なぜか日本の牝牛に感染せず、蘭学医は感染の継続に悪戦苦闘する羽目になった。

佐賀藩主・鍋島直正さがはんしゆ なべしなおまさは長崎警備を担当する地の利を活かし、幕府に無断で、オランダ経由で牛痘を輸入する手配を行なった。

その試みを推進したのはシーボルト門下の蘭学者であり江戸詰め

の藩医・伊東玄朴^{げんぼく}、長崎在住の檜林宗建^{おおいしりようえい}、在郷の大石良英^{らんへき}だった。彼らは、蘭癖大名として名高い鍋島直正が、兵学や国防に寄与させようとして、集めた蘭学者たちだった。

かくしてシーボルトの企図^{きと}から四半世紀後の嘉永二年八月、出島に着任したモーニケ医師が、ついに牛痘株を日本にもたらしたのである。

それまでは感染者の痘漿を輸送しようとして失敗を重ねていたが、今回は瘡蓋にして成功したのだ。

それはバタビア医事局長が自分の息子に牛痘種痘して採取したものだだったという。

*

八月下旬。

かつての門人が「牛痘が長崎にて生着」の一報をもたらしてから、時が止まってしまったかのように、洪庵の元には情報が入らなくなつた。

京と浪速は目と鼻の先、徒歩でわずか一日の距離である。

焦れた洪庵は、京に上り、日野鼎哉から直接話を聞こうとした。

それを止めたのは、鼎哉の実弟の日野葛民だった。

「わが兄は狷介な性質で、特に医学のこととなると、相手が師であつても妥協せず一步も退かぬ。そのため帆足万里師匠から破門される始末。加えて細かい性格で、他人の過ちを寛恕する器量に欠けるところがある。それに洪庵殿が今、直接面談するのは危うい。京では『京の鼎哉、浪速の洪庵』という評判になっているそう。洪庵殿が訪問すれば、兄は敵愾心を燃やし、やぶ蛇になつてしまう可能性もある」

「それは私に対する過大評価です。でもそれならば、どうすればいいのでしょうか」

「兄から情報を聞き出す前に、他の人物から客観的な情報を得て、それを元に兄と談判するのが上策かと」

洪庵より五歳上の葛民は、大人の風格を漂わせて言う。

「日野先生よりも早く、長崎の情報を得られる人物など、他にいるはずがないでしょう」

「さて、それはいかがなものか。長崎で牛痘苗を入手したのは、どなたでしたかな」

葛民がにっこり笑つてそう言うと、洪庵は、はっと顔を上げる。

彼の脳裏に、だんだら模様の派手な着流し姿で、豪快に笑う巨漢の顔が浮かんだ。

「そうか、京には檜林栄建殿がいらしていましたね」

日野葛民はうなずいた。

「その通り。ひよつとしたら栄建殿のところにも、いち早く痘苗が届けられている可能性もあるでしょう」

それなら、栄建殿を訪問すれば万事解決するかもしれない。

だがいずれにしてもその前に、浪速で種痘を展開、維持できる下拵しとせえをしておいた方がいい。

話はそれからだな、と洪庵は思った。

洪庵は、馴染みの大和屋喜兵衛なまじ やまとやきへえに、牛痘株が長崎で生着したこと、それが京に持ち込まれるかもしれないこと、そうならそれを大坂にも運び、種痘所を開設したいことを一気に語った。

大和屋は西洋薬を扱う薬種店やくしゆの開祖かいそで、洪庵にとって医業の師さだと懇意こんいの間柄で、適塾の開塾にも全面的に協力してくれた人物だった。

大和屋は、牛痘法をなんとしても世に広めたいという、洪庵の宿願をよく理解してくれているので、話は早い。

「それはようござんした。この大和屋、全力でご依頼に対応させていただきます。実は建屋たてやの目星はどうにつけてありませう」

打てば響くような言葉が返ってきた。

「ありがたい。いつも世話になってばかりで申し訳ない」

そう言って洪庵は、深々と頭を下げた。

大和屋は、太った身を揺すりながら、両手を振ってその言葉を遮さへきつた。

「洪庵先生、頭を上げておくんはなはれ。そんなん、水臭いでつせ。わては洪庵先生の、ひとりでも多くの子どもを救いたいという、その心意気に惚れとるんや。浪速の商人は、がめつく稼いで綺麗かみに使うもんや。浪速の川に掛かる八百八橋は、どれひとつとしてお上の世話にはなっておりまへん。みんな、浪速の商人が人々のためを思い、掛けたものでんねん。けど、あいにく橋は必要なだけこさえられていて、これ以上は必要ありまへん。乗り遅れた大和屋は、『種痘館』という、大きな太鼓橋たいこばしを作りたいだけなんでつせ」

「まことにかたじけない」と言つて、洪庵は目頭を押さえた。

こうして後顧こうこの憂いうれを無くした洪庵は、日野葛民と共に京へ偵察ていさつに向かったのだつた。

今回の痘苗輸入たてやくしやの立役者は檜林宗建たけだったが、兄・檜林栄建もかつて、長崎で町年寄まちどじより・高島秋帆たかしましゆはんと謀り、牛痘菌の導入に協力していた。

海防の要を説く秋帆は江戸に招かれ、卓越たくえつした西洋の兵術や洋式砲術、その思想と技術を江川太郎左衛門えがわたろうざえもんや佐久間象山さくましようざんなど開明的な人物に教授していたが、そのため攘夷主義者じやういぎに目の敵かたきにされ、反

動に走った幕府にも目を付けられていた。

天保十三年（一八四二）、疑獄ぎよくに問われた秋帆は江戸にて二年の入牢ろう、八年の幽囚ゆうしゆうの憂あき目に遭あう。

その累るいを逃れるため栄建は弟の宗建に家督かどくを譲り、鳴滝塾同門の日野鼎哉がいる京に身を潜めた。そしてその直後、京で開業したのだ。

「おお葛民、久しぶりだな。見たところ、いつもにまして元気そうたい」

そう言つて栄建は、葛民の肩を大きな掌てのひらでばんばん叩いた。

葛民は迷惑そうな顔をするが、いつものことと慣れているのか、文句は言わない。

すると栄建は、今度は洪庵に抱きついてきた。

「洪庵殿とは長崎以来やね。懐なつかしか。すっかり名を上げたのですな。ばってんおいは、長崎で会った頃から、こん人は絶対に大物になる、と思うとつたとよ」

「過分な褒め言葉、ありがとうございます。でもそんなことより、今日は伺いたいことがございまして。実は……」

そう言いかけると、栄建は手を上げて、洪庵の言葉を制した。

「みなまで言わんとも、お二人がここに来た理由など、とうに察しとるばい。牛痘のことやろ」

「ご明察めいさつです。主導したのは越前とも長崎とも佐賀とも聞きますし、清国から輸入するはずがオランダから入ってきたなど、話が錯綜さくそうしており、本当の様子がさっぱり見えてこないのです」

「せやろな。それは当然のことで、結論から言えば、それらの噂うわさは全部本当たい。おいも、ややこしすぎて頭が爆発しそうだったばい」
そう言いながらも、さすがに当事者にきわめて近いところにいるだけあって、栄建の説明はよく整理されていて、要領を得ていた。事情は以下のようなことだった。

越前藩主の松平春嶽侯が藩医・笠原良策の献策けんさくを受け、幕府に牛痘輸入願いを出した。

それに対して、江戸の老中首座しゅざ・阿部正弘が認可して、長崎に正式に指令を出し、輸入先を清国とした。

これは真実だ。

笠原良策は日野鼎哉の弟子で、これは師弟合作の献策だった。

日野鼎哉はその仲介を旧知の唐大通事・穎川四郎八えがわしろうはちに依頼した。これが幕府公認の正式ルートである。

ここで伊東玄朴が登場する。彼は長崎在住の藩医、榎林宗建と協力し藩主・鍋島直正に働きかけ、オランダから牛痘を輸入する依頼を出した。

洪庵はこのことを、かつて玄朴が適塾に立ち寄った際、直接本人の口から聞いている。佐賀藩は長崎の防備を担当しているので、長崎の役人に顔が利いたのである。

ただしこれは幕府の許しを得ていない、いわば闇ルートである。ここで六月に長崎に到着した蘭医モーニケが、バタビアから痘苗を持ち込み、準備万端で待ち構えていた檜林宗建が無事、生着させた、というわけだ。

ところが幕府はその直前の三月、医学領域に蘭学の導入を禁止する「蘭方医学禁止令」を出したばかりだった。

あまりにも間が悪かったため、幕府はこの快挙に知らん顔を決め込んだ。そればかりでなく、長崎奉行に対し、みだりに牛痘株を外に出さないように、という沙汰まで出してしまおう。

こうなると唐大通事・穎川四郎八の面目は丸つぶれだ。

だが穎川四郎八は、自分の面子が潰れたことはどうでもよかった。それより、正式に依頼してきた越前藩の依頼を叶えられないことに、忸怩たる思いを抱いていた。

その上、佐賀藩が裏から手を回した牛痘だと、幕府は面子を守るために、裏で手を回して潰してしまいかねない。

そこで穎川四郎八は一計を案じた。

それがオランダ株を越前ルートに乗せてしまうという離れ技だ。

天資温雅、外和内剛、至誠の大人物で、長崎の人々から敬愛されていた穎川四郎八は、仲間の大通詞から斡旋された痘苗を孫に接種した。

それはいわば、とっさの思いつきによる機転だった。

そうして得た八個の痘瘡の瘡蓋を、日野鼎哉が開発した輸送壇に入れ早馬で京都に送った。

穎川四郎八がいかに超特急で瘡蓋を京都に送ったかは、その日程を見ればわかる。

八月三十日、孫に種痘を実施し善感を確認すると、九月六日夜に長崎を出立した早飛脚は、二百六十里をわずか十三日で踏破して、九月十六日に京の日野鼎哉の元に到着していた。

以上の裏事情を一気に語り終えると、檜林栄建はほっとひと息ついて、にっと笑う。

「実はおいのところにも弟の宗建から瘡蓋が届いとる。今、種痘を植えた結果待ちたい」

「なんと、栄建殿のところにも、痘苗が送られてきていたのですか。それなら是非、わが浪速に分苗していただけないでしょうか」

思わず、洪庵の顔がほころんだ。

だが意外にも、栄建は首を縦には振らなかった。

「それはできん相談たい。痘苗は長崎から外に出してはいかんと決まっとる。その禁を破つたら、弟に迷惑をかけてしまふたい」

「そこを枉まげて、なんとか……」

洪庵にしては珍しく、執拗しつように食い下がった。

だが栄建の答えは、つれないものだった。

「ダメなものはダメたい。そんなことをしたら、わからんちんの幕府が、痘苗を禁制にする口実こうじつにしてしまいかねない」と

その考えは全く正当なので、洪庵は引っ込むしかない。

肩を落とした洪庵を見て、気の毒に思ったか、栄建はぼそりといつげ加えた。

「越前の牛痘輸入は、幕府の正式な許可を得ておるもんたい。だからまずはそこからもらえるよう、やってみたらよか。それなら堂々と種痘をやれるたい。ばってん、もしもその道が途絶えたら、そんな時は、おいのところの痘苗を、こっそり使えばよか。お上を相手にするんなら手順を踏んで、不必要な諍いさかいはできるだけ避けるが吉た

「と」

栄建の来し方を眺めれば、その言説には一層の説得力があった。

正しいことが世に受け入れられるとは限らないということを、栄建は身を以て実感していたのだ。

その言葉を聞いて洪庵は、はっと我に返る。

自分はかつて、泰然たいぜんに罵られるくらい、四角四面でお上に忠実なはずだった。

それなのに今の自分は、まったく違ってしまったているではないか。なんたることか……。

「栄建先生のおっしゃる通りです。まず正々堂々、正面突破を目指すことにいたします」

「洪庵殿は相変わらずクソ真面目で、悲壮な顔をしとるばってん、もつと気楽に構えておればよか。世が必要とすることならば、必ずや神風かみかせが吹くもんたい」

栄建はそう言って、洪庵の肩を大きな掌でばんばんと叩き、豪放ごうほうに笑った。洪庵は、張り詰めていた気持ちやわが、ふうっと和らぐのを感じた。

その日、洪庵と日野葛民は一旦大坂に戻り、改めて出直すことにした。

牛痘が到着した前後の情報は、当事者の日野鼎哉・笠原良策の師弟の間でも錯綜さくそうしていた。

八月初旬に頼川四郎八から長崎での牛痘生着の報を受けた日野鼎哉は、越前の弟子、笠原良策にその一報を送る。

良策は直ちに江戸詰そばようじんの側用人・中根雪江に連絡した。中江が急ぎ

上申すると松平春嶽は良策に対し、「直ちに長崎に行き、これを入手せよ」と命じた。

江戸と越前は百三十里。現代と違いこの頃は、どれほど急いでも片道三日掛かった。良策は、さぞやもどかしい思いをしたことだろう。

良策は取るものも取りあえず九月三十日、直ちに越前を發った。

「白翁」の号を持つ歌人でもある彼は、次の和歌に、その時の悲壮な心持ちを吐露している。

たとへ我 命死ぬとも死なましき

人を活さむ 道開きせん

十月五日、京に入った良策は、師・日野鼎哉に経緯を報告するため、立ち寄った。するとなんとということだろう、長崎から届いた牛痘の生着を、祝っているではないか。

驚く弟子の顔を見た日野鼎哉は、喜びに満ちた声で、事情を語った。

「儂は京都で継痘を確立し、新たな痘漿か瘡蓋を得て、越前に送ろうと考えておったのよ。ところが九月十九日に瘡蓋を受け取った夜、孫の朔太郎に接種したが善感せず、その後も失敗続き。二四日には

最後の一粒を何人かの子に接種し、もうだめかと諦めかけていたところ、ようやく善感と相成ったのや。六日後の九月三十日に痘漿を取り、再び孫の朔太郎と弟子の桐山元中の姪に接種すると、まともや成功した。その朗報を、今まさに福井に送ろうとしていたところやった」

「九月三十日とは、なんとという奇遇でしょう。まさにその日に、わたくしは福井を発ったのです」

良策が震える声でそう言うと、鼎哉は彼の手を握りしめて言う。

「これは、天のご加護や。それと、江戸表から指示があるまで痘苗の持ち出しを厳禁した長崎奉行のお触れがあつたにも拘わらず、痘苗をいち早く届けてくれた穎川殿の機転と敏速な行動のおかげでもある。そしてそれらを引き出したのはひとえに、おぬしの主君、福井藩主・松平春嶽侯の仁恵と威光、その恩沢のおかげや」

良策と鼎哉の師弟は、抱き合つて男泣きした。

これで長崎に西下する必要がなくなった笠原良策は、安堵して旅装を解いた。

こうして笠原良策は、しばしの間、京都の師・日野鼎哉の屋敷に寄居することになった。

嘉永二年十月十六日、新町通三条上ル頭町に、「京都除痘館」が設立された。

それは継痘が京で成功して、わずか二週間余のことだった。

開館式で鼎哉一門は「正しく種痘を広め、利を貪らず」という「救命の誓い」を立てた。そして鼎哉と弟子の桐山元中は、除痘館のため家業が傾くのも厭わないと宣言した。

来賓には、内大臣・醍醐輝弘も臨席し、自分の孫に種痘を施した。

同じ十月、檜林栄建の元にも弟・宗建から痘苗が送られてきた。

栄建「鳩居堂」の熊谷父子の助力を得て、京の新町通に種痘所「有心堂」を設置した。

日野葛民、緒方洪庵、小林安石という浪速の蘭医三人衆が、子を連れて「京都除痘館」を訪ねたのは十一月一日。

これも開設からわずか十六日後のことだ。

「京都除痘館」を訪問する前に洪庵は、日野葛民と共に再び檜林栄建を訪れ、詳しい情勢を訊ねた。

栄建は腕組みをして、巨体を揺すりながら、うーん、と呻いた。

「おいも会うてみたばってん、福井の笠原良策というお方は、洪庵殿に輪を掛けて融通が利かなそうな方ばい。一本、芯が通っておつて、なかなか自説を枉げないようにお見受けしたと。その性質もさりながら、洪庵殿と年格好もそっくりりたい。まあ、とりあえず今宵、おいが設けた、京都除痘館での宴席で直談判するのが、一等の早道やろ」

礼を言って、洪庵は、一旦檜林栄建の許を辞去じきよした。
そして不安と希望と絶望が、ない交ぜになった心持ちで、晩の宴席を待ったのである。

さすが羽振りも気つ風もよい檜林栄建が整えた宴席だけあって、豪華でありながら雅みやびな食膳しょくぜんがずらりと並んだ。

宴うたげの名目は、大坂蘭医との懇親会だった。

だが洪庵は豪勢な料理には目もくれず、ひたすら上席の笠原良策を見つめていた。

実際に会った福井藩侍医の笠原良策は、想像以上に頑固がんこ一徹いつてつそんな人物に見受けられた。

宴えんもたけなわになった頃、洪庵は思い切って分苗の依頼を切り出した。

良策はじろりと洪庵を見て、咳払いせきばらいをした。

「この種苗はわが君、春嶽しゆんがく侯が福井藩の下々の者のため、頭を下げて頂戴ちやうだいいたしたしゆめいもの。主命しゆめいなくして軽々けいけいに、他藩の者に譲り渡すことはできぬ相談である」

「ですが牛痘の普及は大坂の民にとっても大切なことなのです。ひとつでいいので、どうか瘡蓋を分けていただけませんか」

「それは無理な申し出だ。お上も、越前に牛痘が生着するまでは他

所に出してはならぬ、と長崎奉行に厳命されておる。百歩譲って、わが君のお許しがあれば、考えないこともないが」

洪庵は咄然あぜんとした。今から、五十里近く離れている福井に行つて、殿さまの許しを得てこい、というのか。

杓子しゃくし定規じじょうぎなお方だ、と思ひ、腸はらわたが煮えくりかえる思ひだつた。だが洪庵とて、この件ではおいそれと、左様さようですか、と引き下がるわけにはいかない。

浪速では蘭学仲間たちが、期待を抱いて牛痘の到来を待ちわびているのだ。

洪庵は、薄い冊子を思ひ出す。

その書を訳した緒方郁蔵いくぞうと有馬撰蔵ありませつぞうの顔が浮かんだ。

——亡き撰蔵の想いに応えるためにも、むぎむぎ引き下がるわけにはいかぬ。

そうした思ひが煮詰まつた時、息苦しい気持ちだが、ふうっと自分から抜け出した。

そこには、自分と向き合っている佐藤泰然の顔があつた。

洪庵は、洪庵と向き合っている泰然の中に入り、笠原良策の姿が洪庵自身の姿と重なつた。

——どうだい、章あきら、おいらの苦勞がわかつたかい。

かつて泰然が投げつけてきた言葉が、浮かぶ。

——なるほど、あの方が私に対する時は、いつもこういう気持ちだったのだな。

すると意固地いこじな良策の言葉に対しては、自分の気持ちをも、外側から冷静に見ることができた。

その時、洪庵は閃めいひいた。

それなら、かつて自分が言われて、むかついたけれども理はあると思われた、泰然のような言い方をすれば、突破口とつばこうが開けるかもしれない。

しばし考え込んだ洪庵は、おもむろに口を開いた。

「あいや、笠原殿のご忠義まことぶり、誠に天晴あつぱれ。ところで良策殿は、どうして牛痘の苗を、取り寄せようと思われたのですか？」

その質問は、良策の虚きよを突いたようで、一瞬、黙り込む。だがすぐに怒ったような口調で言う。

「そんなことは、今さら言うまでもなからう。思い返せば福井では、連年、痘瘡の流行が起こっていた。特に弘化元年こうか（一八四四）の流行はすさまじく、福井藩内で一人人を越える幼児が痘瘡で死亡した。その惨状さんじょうを見て、矢も楯たてもたまらず、某それがしは牛痘を輸入すべし、と低い身分であることも顧みかえりみず、畏れ多くも藩主さまに直訴じきそしたのだ」

「なるほど。それなら、大坂の幼児も大勢亡くなっていることは、

笠原殿にとっては、何の関係もない、ということなのですか？」

良策はぎよつとして黙り込む。藩命を果たすということに囚とらわれすぎて、自分が一番大切なことを見落としていたことに、気づかされたのだ。

洪庵は静かな声で、更に続ける。

「もうひとつ、伺いたいことがあります。もし仮に、痘瘡の瘡蓋が途中で効力を失したならば、今度は不忠義者の汚名をかぶることになってしまいませぬか」

「心配はご無用。その時は笠原良策、この腹を真ま一文字にかつさばき、主あつしにお詫わびを申し上げるまで」

「しかしそれでは、せつかく牛痘の苗を手にながら、子どもを救うという目的は果たせなくなってしまう。それは自らのお役目を果たさず、責を投げ出すようなものではありませんか」

ぐつと言葉に詰まった笠原良策に、洪庵はここぞとばかりに畳たたみかける。

「私にひとつ、考えがございます。京では檜林殿の種痘所があります。元になる痘苗は二カ所にあつた方がより安全になりますから。いかがでしょうか？」

巨漢の檜林栄建の銅鑼どら声こゑが、合あいの手を入れる。

「なるほど、これはあくまでも福井藩へ痘苗を届ける一環で『蕃殖はんしょく

（続苗）』のため、というわけだな」
ぞくびょう

洪庵はうなずいた。

そして笠原良策に相對し、畳に頭をこすりつけ、平伏する。
へいふく

「栄建殿のおっしゃる通りです。私は今回の一報を聞き、牛痘接種を実施する建物の目星もつけて参りました。そんな風に施設が整っているのは、京の他には、浪速しかございません。栄建先生のご厚意で、私は長崎では『遁花秘訣』とんかひけつを拝読し、種痘法の研究を続けて参りました。種痘用のランセットの使い方にも習熟しております。そうしたことを含みおき今一度、なにとぞご配慮のほどを」
か　　はいりよ

それは普段の洪庵とは似ても似つかない、大言壮語ぶりだった。その発言の半分は本当だったが、何ひとつ裏付けはない。

「種痘館」の設立を大和屋に頼んだのは事実だが、まだなにひとつ確定していない。痘苗を分けてもらえなければ、種痘を実施する屋敷を手配する意味がなくなるのだから、当然だろう。

平伏を続けながら、洪庵は思う。

——なにやら、泰然殿の悪い癖が、乗り移ってしまったかのような……。

そんな洪庵を見て、笠原良策はしばし考え込んだ。

重苦しい沈黙が場を支配した。やがて、日野鼎哉が口を開いた。

「笠原殿の言い分もつともやけど、わたらの痘苗はそもそもが、

お上の許しを得ていない、非合法なものや。万が一これが絶苗したら、お上はこれ幸いと、牛痘苗を長崎の外に出すのは罷り成らん、と言うやもしれん。ここはひとつ、大坂にも分苗所を作り、既成事実にしてしまった方がよろしいように思うんやが、どないやろ」
そう言うのと鼎哉は、弟の葛民を見遣り、続けた。

「実はこのことは愚弟に諭されたことや。兄に意見するとは、誠に怪しからん。腹に据えかねておるが、一聴の価値がある意見やと思
う」

洪庵は驚いて、日野葛民を見た。

黙々と杯を干していた彼は、洪庵に向かって片目を瞑ってみせた。

誰も口を開こうとしない。

洪庵にとって、無限にも思われた、長い長い静寂が続いた。

やがて、笠原良策は静かにうなずいた。

「確かにその方が安全のようだ。本来福井藩御用である痘苗は、某の判断で勝手に分け与えることはいかんが、福井藩に届ける痘苗の予備という形にすれば、浪速に分苗しても問題にはならないかもし
れぬ」

「ありがとうございます」と再び平伏した洪庵の頭上に、栄建の割れ鐘のような大声が響く。

「まずはめでたい。皆の衆、祝杯しゅくはいば、上げ申そう」

そのひとで、緊張していた場が和んだ。

洪庵が顔を上げると、気難しい顔をしていた笠原良策も、穏やかな微笑を浮かべている。

——本来は、こういうお方なのだろう。重い任務に押し潰され精一杯、緊張きばっておられたのだ。

そう思うと、同い年だという笠原良策に、急に親しみが湧いてきた。

洪庵が「準備は整っている」と大見得おおみえを切ったせい、日野鼎哉は、大坂に向いて分苗式ぶんぶうしきを執とり行ないたい、と言いつ出した。

それはおそらく、洪庵が口舌くわうせつの徒とかどうかを見極めようとしたものだろう。

そこで直ちに供に連れてきた塾生を浪速に引き返させ、そのことを大和屋に伝えさせた。

実際、洪庵の支度は万全だった。

彼は長崎の蘭学仲間から、当時ロンドンにあった天然痘てんねんとう専門病院や種痘院についての情報を得ていた。

それだけではなく、適塾の移転を経験していたので、新しい家屋かおくを準備するコツも掴つかんでいた。

洪庵が見切り発車した「種痘館」ならぬ「保痘館」はこうして、

あれよあれよという間に姿を現した。

建屋は過書町適塾からそう遠くない、主に古物を扱う古手町ふるてに開設された。

そこは社中しやちゆうの中心人物、日野葛民の医院がある道修町五丁目の御ご霊筋りようすじを東へ入ったところで、目と鼻の先という好立地だ。

けれども「保痘館」という名称だと「痘瘡を守り保つ場所」と誤解されかねないという指摘があったため、数日後に「除痘館じよちゆうかん」と改称して、京からの痘苗の到着を待った。

嘉永二年十一月六日、牛痘に善感した子連れて、日野鼎哉と笠原良策が「大坂除痘館」に到着した。

翌七日、「伝苗式でんびょうしき」が、厳おひかに執り行なわれた。

そして同時に、浪速における牛痘社中の結成式と相成った。

正面には京都除痘館と同じ様に少彦名命と、福井藩主・松平春嶽侯、長崎通事・穎川四郎八という、牛痘を得た立役者の名を紙に書き、並べて神位しんいとした。

浪速方では緒方洪庵、日野葛民、大和屋喜兵衛の三人が社中を結び、世話役として天游てんゆうの实子の中耕介なかこうすけ、山田金江きんこう、原佐十郎はらさじゆうろう、村井俊蔵しゆんぞう、内藤数馬、山本河内かがみ、各務相二、佐々木文中、そして洪庵の義弟の緒方郁蔵の九名が参加した。

そこには天満あまな与力よりちからの荻野七左衛門おぎの、その父親かんざの勘左衛門えもんも顔を見

せた。

「伝苗式」で最初に接種を受けた八人のうち五人は、東西の大坂奉行所の与力の子である。

洪庵がいかに浪速の行政を司る町奉行から信頼されていたか、よくわかる逸話だった。そんな背景が、大坂の「除痘館」成立の追い風になったことは間違いない。

その日、「除痘館」で洪庵は、八名の子に手際よく痘漿を植えて、社中の面々に種痘法の手本を見せた。

始めに種痘を受けたのは与力の荻野の息子だった。

彼は種痘の何たるかを、親からきちんと言い聞かせられているよ
うで、洪庵の前に、行儀よく座った。

だが洪庵が檜林栄建から伝授されたランセットを手に取ると、目をぎゅつと瞑り、身を固くした。

「大丈夫、痛いのはほんの一瞬、少しだけだから」

洪庵の優しい声に、子どもはおそるおそる、薄目を開く。

洪庵は、その子の二の腕をそっと掴み、説明しながら手を動かす。

「まず両腕に二個ずつ二行、十二箇所に刃先で×の形にチョンチョンと小さな傷をつけます。そこに善感しているこの子の良質な痘瘡の膿じゆくの熟したるを潰し、液を傷口えきに塗り、その上に綿わたを置き、その上から更に膏薬こうやくを貼り、適宜てきぎこれを温めるのです」

「ほんとや、痛いのはちよつとだけや」

与力の子の言葉に、他の子どもは一斉に、ほつとした表情になった。

その後洪庵は、檜林栄建から購入したランセット一式を社中のメンバーに与え、各自に種痘を行なわせた。

種痘の手技は、医家であれば難しいことではない。しかしながら、経験してみないと、自分が実施するときにあやふやになり、間違いを起こしかねない。実際にやってみると、簡単なようであるが、言葉では伝えきれない部分が多々あった。

こうした実技指導は必須であるということを、今回の様子を見て、各々が実感したため、こうした手技の伝授は、その後の社中のしきたりとなった。

こうして「伝苗式」は、種痘の手技の講習会も兼ねることになったのである。

かくして十一月七日、大坂へ牛痘苗の植え継ぎをする「伝苗式」は恙なく終わった。

それは洪庵の宿願だった「大坂除痘館」の創設が叶った瞬間だった。

種痘接種が済むと、洪庵は子どもたちに、一週間後にまたここに来るように、と伝えて家に帰した。

その後、社中のメンバーは日野鼎哉、笠原良策の師弟を交えて祝宴を張った。浪速の蘭学者と意気投合し、すっかり打ち解けた笠原良策は主賓しゅひんの座に就いた。隣に座る洪庵に、上機嫌で言う。

「洪庵殿の種痘術の手技を見致しました。確かに、準備が出来ている、とおっしゃっていらしたのは、法螺ほらではなかったようですね」
これまでの袴かみしもを着て、居丈高いたげだかにも思われた口調が和らぎ、言葉遣いもすっかり丁寧ていねいになっている。おそらくは元来は、このように腰の低い好人物なのだろう。だが、村医者という低い身分でありながら、いきなり親藩しんぱん・福井藩の威信を背負わされた身では、そのように振る舞うしかなかったのだろう。

そう思うと、洪庵の応接も自ずと柔らかくなる。

「私はずっと、種痘を世に広げたいと願っていて、日夜研鑽にちやけんさんしておりましたので」

笠原良策は、満足げにうなずいて続ける。

「なるほど、緒方塾の評判が高い理由が、ようわかりましたわ。しかしながら、天下に名高い緒方塾を、近々わが藩の麒麟児きりんじが震撼しんかんさせることになるでしょうな」

良策の表情は明るく、舌は滑なめらかだ。洪庵は素直に応じる。

「福井藩医のご子息が派遣されてくるのですね」

「左様左様。某は、しがなない村医者ですが、藩医の半井仲庵殿、橋はし

本彦也殿もとひげんやの知遇を得て、三人で『蘭方研究会』を結成しているのです」

「ほほう、それは素晴らしいですね」と言った洪庵は、村医者と藩医が同席して勉強会を開いているという、他の土地では考えられない福井の風通しのよさに感動した。これも春嶽侯の薰陶なのだろう。

良策は、更に驚くべき発言をした。

「その会に参加している橋本氏のご子息こさなの左内殿は、実に驚くべき少年で、よわい齡十六にしてすでに我ら老骨ろうこつを凌駕りやうがしております」

大仰おおおぼやうな良策の言葉に、洪庵は軽く応じた。

「十六とはまた、お若い方ですね。わが適塾の入塾生の最年少になるかもしれません。それはとても楽しみです」

「むう、洪庵殿は、某の言葉を本気にしておられんようですね。まあ、よいでしょう。おいおいわかることですからな。左内殿の父の彦也殿もなかなかの傑物けつぶつで、華岡青洲先生はなおかせいしゆうの門下生で外科でありながら、春嶽侯のご病気の治療に功があり、本来であれば本道ほんだう（内科）しかねれない御匙おさじになられたという、破格の出世をされた方ではない。のみならず蘭学も熱心に学ばれ、長崎蘭通詞・猪俣伝次右衛門殿のご子息・瑞英殿が来福した際に、一年ほど寄宿させたことがあるのです。実は左内殿はその時にオランダ語をほぼ修得してしまったのですよ」

洪庵は驚いて、思わず聞き返す。

「猪俣瑞英殿といえは確か、妹御いもうとごの照殿は伊東玄朴殿の嫁御よめごではありませんか」

「左様左様。そればかりではなく、藩医の半井殿の特別のお計らいで、大坂留学の前に箔付けはくづも兼ねて、刑死者の解剖かいぼうの主解しゅかいも務めることになっております。もともとそれは決して身内みうちびいき鬮頭はつてきではなく、左内殿の実力を考えれば、当然の抜擢ぼつてきでもあるわけでした。ちょうど今時分、執刀しつとうをしている頃かもしれませんな」

「まさか。たかだか十六の若者に、そのような大役を……」
詳しく確認しようとしたがその時、酔っ払った中耕介が、上機嫌で割り込んできた。

「大坂に牛痘がもたらされるとは、まさに兄者あにじやの長年の希望が叶ったのですね。めでたいことです。これも福井藩の笠原先生のおかげです。まあ、一献いっけん」

そのせいで、その話題はそこで途切れてしまった。

だがこの時、橋本左内の名は、洪庵の胸に深く刻み込まれた。

その後、洪庵は笠原良策と二人で何度か会って話をした。

すると、良策は、和歌や絵画を仲間内で楽しむような、風流を解する人間だということがわかった。

ある日、笠原良策が改まって言った。

「実は某には、自慢の一品がございましたな。わが福井には義経伝説の『天馬石』という奇岩があるのですが、ある日、某が絵に描いたところ、仲間内でたいそう褒められましたな。その絵の鑑賞会を開き、歌会仲間^{さん}に讃を寄せてもらい、それを一帖^{いちじょう}の巻物^{まきもの}に仕立てたものがあるのです。洪庵先生が来福されることがありましたら、是非、ご高評を賜りたいものですな」

奥ゆかしい言葉ながら、どこか自慢げなのが微笑ましい。

洪庵も同じように風雅^{ふうが}を好んでいた。なので、一層親しみが増すのを感じた。

「ほう、それは是非、拝見してみたいものですね」

そう言うと、洪庵にも負けず嫌いの気持ちがむくむくと湧いてきた。

「実は私も笠原さまと同じような趣味がございまして、広瀬旭莊先生や篠崎小竹先生といった漢詩の先生や、一緒に歌会をする仲間がおります。近々、私の和歌の師匠の萩原広道先生^{はぎわらひろみち}にお願いして、源氏物語を講義していただくつもりなのです。奇岩の絵画を拝見させていただくお返しに、源氏物語の輪読会^{りんどくかい}にお招きしますよ」

すると笠原良策は目を輝かせて身を乗り出し、「是非に、是非に」と言う。

こうして牛痘を通じて知り合った洪庵と良策は深く意気投合し、

以後、生涯しやうがいを通じて刎頸ふんけいの友となったのだった。

*

「大坂除痘館分苗式」の一週間後の十一月十九日、笠原良策は主命を果たすべく、福井に向かった。

良策の立てた輸送計画は、緻密ちみつで周到なものだった。

十一月十六日、京都で雇い入れた二児に種付けをし、十九日、善感を見極めて京都を出発した。京都で善感した二児と、道中で接種すべく福井から呼び寄せた二児、両親を加えた総勢十二名の大所帯おおじよたいを引き連れて琵琶湖を渡った。

十一月二十三日、大雪の栃ノ木峠とちのきとうげを越えた。

この時期にしては珍しく、栃ノ木峠にはすでに六尺しやくを超える大雪が積もっていた。良策一行は決死の覚悟で雪山を越えた。

一刻も早く、福井に牛痘の種を持ち帰りたかったからである。

七日目は水痘期すいとうに当たり、植え継ぎが可能になる期日である。

そこに植え継ぎ用の子どもを用意しておくわけだ。

二十四日、事前に福井藩の協力者に依頼して、武生たけふで雇い入れておいた三児のうちの一児に接種した。

こうして十一月二十五日、ついに福井に入った。それは出発して、

一週間にも満たない、六日目のことだった。

すると、良策は休む間もなく、到着したその日の午後から、種痘接種を開始した。自分の隣家を仮除痘館とし、良策自ら総裁となった。

だがそれは、決して平坦な道ではなかった。

医療の中心の漢方医の抵抗は強く、町医者ひぼうはいげきの誹謗排撃は激しかった。

なにより、牛痘に対する大衆の無知による感情的反発が最大の難敵だ。

このため除痘館の経営は困難に陥った。

しかし、そのような逆風にもひるむことなく、嘉永四年（一八五
一）十月には、城下の下江戸町に公立の除痘館が設立されることになった。

幾度も訪れた絶苗の危機を脱することができたのは、藩主・松平いくと春嶽の揺るぎない支持と、結束した仲間たちの協力があつてこそだった。

春嶽侯の、種痘に対する理解と強い思い入れが、きわめて早い時期に福井の種痘を藩公認の事業としたわけだ。

笠原良策が種痘を開始した三ヵ月後の嘉永三年（一八五〇）二月にまず、城下に種痘所が設置され、「除痘館」が設立されるのは、更

に一年後の嘉永四年十月となる。

一見、大坂や京都に遅れを取っているように見えるがそうではなく、福井藩はどこよりも早く、種痘所の官許かんきよを認めた、先進的な藩だった。

官許に関して大坂よりもはるかに早く、二年弱で達成できたわけだ。

福井藩の決定を、笠原良策からの私信で聞かされた時、大坂の洪庵は悔しさに唇くちびるを噛かんだという。

*

日本に牛痘を広めることに多大な貢献があった立役者・笠原良策は、遅咲きの蘭医だった。町医者ながら診療の向上に余念がなく、天保十一年、三四歳で蘭学を志し、日野鼎哉の門を叩いた。

弘化三年（一八四六）には、清国で刊行された「引痘新法全書」いんとうしんぼうぜんしよを読み、桐山元中の協力を得て、種痘の種の貯蔵壇ちよぞうびんを、独自の工夫をして作成している。

これが後に、牛痘の痂皮かひを運ぶ時に使われることになる。

そんな良策が牛痘の知識を得たのは弘化二年、良策が二度目の上洛じやうらくを果たした時のことだ。

牛痘の存在を知った良策は、清国から痘苗を輸入しようとして独断で、英明で名高い藩主・松平春嶽に、嘆願書たんがんしょを提出する。弘化三年のことだ。だがこの時は、藩主の耳に届かず不首尾ふしゆびに終わった。翌弘化四年（一八四七）春、笠原良策は師・日野鼎哉を加賀の温泉に招いた。そこで秘湯につかりながら、師弟は策を練った。

「身分の低い村医者が、いくらよい意見を言ったところで、藩主さまには届きはせぬ」

「では、いかがすればよろしいでしょうか」

目に滴したる青葉を見上げ、ほどよい熱さの湯に身を浸しながら、師弟は腹藏ふくぞうなく語り合った。

日野鼎哉が言う。

「藩主さまの覚えがめでたい、ご家老や藩医殿から、口添えくちぞをしてもらうのがよいのではないかな。誰ぞ、知り合いはおらんのか」

「もちろん、おります。某と共に蘭学を学んでいる橋本彦也殿は外科でありながら、藩医に命じられた、たいそうな傑物です。彼は藩医の半井仲庵殿や、御用人の中根雪江殿と懇意なのです」

「ならば話は簡単だ。おぬしが嘆願書を更に磨みがき上げ、まず半井殿と中江殿にお見せし、しかる後藩主さまに提出する。お目通しいただくよう、あらかじめおふたりの重臣にお願いしておけばよいのだ」

実直じつちよく一辺倒いっぺんてうの良策にとって、その言葉は目から鱗うろこが落ちる思い

だった。愚直ぐちよくな彼は、そんなことを考えもしなかった。

日野鼎哉は、更に続けた。

「松平春嶽侯は、きわめて開明的なお方だと評判が高い。しかも、更によいところは、春嶽侯は先の將軍家慶いえよしさまの従兄弟いとこで、次の將軍になるやもしれぬという評判もある。幕府への影響力も大きいと聞く。さすれば春嶽侯から幕府にお伺いを立てれば、親族でもある老中首座・阿部正弘殿のお力を得ることも、決して無理な話ではない」

加賀の秘湯で語った日野鼎哉の言葉は概ねおおむ、その通りになった。嘉永二年、笠原良策は、二度目となる、痘苗取り寄せの嘆願書を松平春嶽に提出する。今回は春嶽侯はこれに目を通し、左右の中江・半井の両名に諮はかった上で、良策の意見を採用し幕府に請願せいがんした。

老中首座・阿部正弘は直ちにこれを長崎奉行に移牒いちじょう、内命をくだす。

こうして、日本に牛痘がもたらされるための下地ができたのである。

しかしその後、反対勢力の巻き返しもあり、「福井除痘館」が正式に開所したのは、九年後の安政五年（一八五八）になった。

この年、福井の英俊えいしゆんとの盛名が高かった橋本左内は、「安政の大

獄」で謹慎させられ、その翌年、処刑されてしまう。

越前の地は、若き譜代の英明君主・松平春嶽を受け入れ、彼は俊英・橋本左内を抜擢した。その知遇に答えて、若き駿馬は全身全霊を捧げて、福井藩のため活躍した。

だが福井藩は、旧弊溢れる土地でもあった。

そのため種痘という、清新で画期的な試みは立ち枯れ寸前に追い込まれ、何度も絶苗の憂き目に遭い、勇猛果敢な駿馬は無残にも頓死させられてしまうのである。

現在の福井では、笠原良策の偉業は、単に福井に種痘をもたらした、という業績として認識されている。だが、橋本左内同様、笠原良策もまた、明君・松平春嶽侯の薫陶を得た者だった。

そしてその偉業は、実は日本全体に貢献する、気宇壮大なものだったのである。

(つづく)